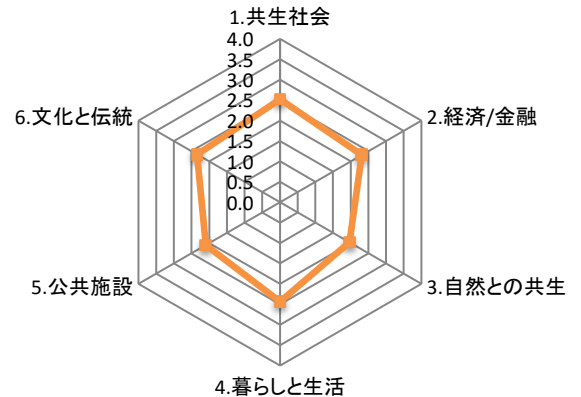


喜多方市山都地区ワークショップ（2016年1月28日 14:00~17:00、いいで荘会議室）

山都地区の豊かな地域資源を活用し、地域の活性化を図ることを目的に結成された「e-De あいこさえ隊」の皆さま14名（商工会、山都そば協会、山都地区グリーン・ツーリズム推進協議会、山都町郷土史研究会、山都若衆会の方等）にお集まりいただき、ワークショップを行いました。各自の質問票の回答を集計後、参加者全体によるチャートを作成し、山都地区の「地域の力」を視覚的に捉えることを試みました。その後グループ内で、各自のチャートも共有しながら、地域の強み・弱み、それらへの取り組みについて議論し、その結果を、最後にグループ毎に発表しました。



山都地区ワークショップ「地域の力」診断ツール全体チャート

全体のチャートは、「共生社会」と「暮らしと生活」分野の評価がやや高く、「自然との共生」「公共施設」がやや低い、縦長で下方幅の狭い形となりました。人間関係の豊かさ、1ターン者の多さが強みとして指摘され、色々な人々とのコミュニケーションの場を設けること、高齢者を宝として伝統文化等を継承する機会をつくることなど具体的な取り組みの提案が出されました。名物である山都そばの積極的な活用についてもアイデアが出されました。



ワークショップを実施して

福島県喜多方市山都地区

浅見彰宏（特活）福島県有機農業ネットワーク 理事・事務局長、ひぐらし農園主宰

旧山都町は平成の大合併の際に喜多方市と合併した。その後、旧喜多方市が行政施策等の中心となる中で、山都地区は周辺化されていくなにかしなればと思っていた。地域の力診断ツールのワークショップを山都町で行った最大の効果は、自分たちの地域を考え直す良いきっかけになったということだった。

比較的地域のことをよく考えている人たちや団体の方々に集まってもらった。日頃、自分たちの職業に関わることについてはよく考えているが、地域の足元を見ることは少ない。リーダーの有無によって、地域間格差が出てきていると思うので、今まで何かやらなければと思っていた人々にとってもワークショップは良いきっかけになっただろう。終了後の懇親会の中でも、いろんなアイデアが出てきて活気づいた。診断ツールは今後改訂を重ねつつ、他の地域にもどんどん持ち込んで行く中で、新しいアイデアが出てくることを期待している。

日本中どの地域も縮小している。江戸時代から続く山腹水路からの農業用水により棚田を維持してきたが、農家の減少に伴い、水路を維持することが難しくなってきた。都市の人々に堰浚いのボランティアとして協力してもらうことで、水路の維持管理を行う取り組みを続けている。ボランティアの人にはお米やお酒も買い支えてもらっている。ボランティアの人数は毎年約50名、関係者はトータルで数百名にもなるが、年間に消費するお米や農産物の1割でもその方達に買ってもらえれば、大きな力になる。そのような経済的なつながりがこれからの課題と感じている。

最近、山都にも、若者の宿泊が増えてきた。彼らは将来に対する不安をものすごく感じている。そして、田舎に息づく生きる力に惹かれているように思われる。「会津留学」と銘打ち、生きる知恵や技術を学べる場を作っていきたいと考えている。空洞化した社会の中で人間性を取り戻すことができれば良いと思っている。

（2016年3月4日「地域の力」フォーラムシンポジウム報告より）

